

『女殺油地獄』小考

馬淵 康子

一

近松の浄瑠璃は大きく時代物と世話物とに分けられるが、当時、世話物が人気を得たというのはやはり人々の身近におこったこと、あるいは身近に感じられるようなことをその題材とする現代劇だからであろう。これらの中には武家社会を扱ったものもあるが、その多くには庶民社会の出来事がとりあげられている。心中事件を扱ったりあるいはそれに類する男女間の愛情を主題とするものが多いが、最後に悲惨な結果をみなかったものは、『丹波与作待夜小室節』など全二十四曲中わずか数篇にすぎない。

近松の世話浄瑠璃について論をすすめる場合、よく「世話悲劇」という言葉が用いられる。今ここにその結末がハッピーエンドにならないものを指して悲劇とするなら、心中・犯罪・姦通・殺人等をテーマとする殆んど作品がそれに含まれるであろう。勿論、部分的な悲劇をも数えるならば、近松の世話物において悲劇性のないも

のは皆無といつてよい。最後がめでたしめでたしで終るものでも途中に必ず何らかの紆余曲折が用意されており、悲劇的構成がとられているからである。

ここでいう「世話悲劇」の悲劇とは、いわゆる「シチュエーションの悲劇」といわれる義理と人情の板ばさみ、葛藤を描いた悲劇を指す。「某が憂はみな義理を専らとす」というように近松が重視した義理は、いろいろな形をとりながら金銭の問題と共にしばしば一曲の構成展開上のキーポイントとなるのである。こうしてみると、近代の性格悲劇がその要因を内面に求めるのに対し、近松の世話悲劇は外的要因からくる悲劇ということになる。しかし、世話物二十四曲中一篇だけあながちそうとばかりはいきれない作品がある。それが『女殺油地獄』である。これを悲劇とみるかみないかは別として、この曲がシチュエーションの悲劇とばかりはいえないことは確かである。

『女殺油地獄』は、いろいろな点で近松の世話物中異色の作品で

あるといえる。もちろん、この曲にも伏線や観客をひきつけるいわゆるさわりを用いて一曲の盛り上り、構成を助ける従来の近松の手法もあちこちに見られはするが、唯一の殺人事件を取り扱った作品であること、他の作品がおおく主人公の恋愛をその構成の基本的なラインとするのに対しこれにはそれがなく、主人公が同情の余地のない徹底的な不良青年であること、そして、よくいわれることであるが、リアリティーにあふれた描写をもつこと等々、数多くの特色があげられるであろう。

では、この曲は一体悲劇といえるであろうか。自分勝手に軽薄で、狡いくせに小心な不良青年河内屋与兵衛、彼が「柳腰柳髪」の「見かへる人も、子持とは見ぬ花ざかり」のお吉を、彼女から借金できないと知るや、居直って殺し、金を奪うというのがこの作品の骨組みであるが、この筋だけから考えると、悲劇はむしろ殺されたお吉の側にあるのであって、全体としては残酷な猟奇趣味の匂いにするにすぎない。これを悲劇と考えるには、樋口慶千代氏の御指摘のように金の必要性のほかにやはり主人公与兵衛をそこまでたち至らせた要因として、特異な家庭環境やその複雑な人間関係の相剋からくる家庭教育の欠陥ということが考えられるであろう。元使用人の継父、その夫への気兼ねから表面はきびしい実母、父違いの妹、それに何かにつけて比べられる分家した「こうとうな」兄太兵衛、これらが互に義理立てし合い、父は、子に対しては「もとが主筋下人筋の親と子」とか「ふたりの子どもに心をつくすは皆故旦那への奉公」と感じ、妻に対しては「義理がたい生れつき」と感じている

し、母は、子の為にわが夫へ「夫婦の義理さへ……」と気をつかっているのである。確かに不自然きわまりない家庭環境ではあるし、又ここからくる親同士義理の立て合いや遠慮から父も母も共に与兵衛兄弟に対して優しき厳しき両面の親の真の愛というものが充分でなかったことは否定できないであろう。しかし、これは近頃青少年の犯罪などが摘発される毎に、「社会が悪いんだ」、「社会の責任だ」などととかくいわれがちなと同様、責任を転嫁した考え方ではないだろうか。父徳兵衛の立場となれば精一杯、いやむしろ充分すぎる程努力しているのである。現に、同様に育てられた兄太兵衛は順慶町に分家までしているし、「腹に宿った母ちゃんと連れ添ふお前、真実の父と存ずる」とまで言っているのである。太兵衛も与兵衛も父に対しては全く同じ立場である。しかも「親旦那往生の時、そなたが七ツのらめは四ツ」と徳兵衛の言にもあるように、太兵衛は兄だけに「ほん様兄様、徳兵衛どうせいかうせいと言うた」昔の生活も与兵衛よりずっとよく覚えてはいるはずである。その太兵衛が「こうとうな」と人からいわれる人物に成長しているのだから、与兵衛にそれが無理なことはいはずである。樋口氏のいわれるように、与兵衛が「両親の愛におぼれて漸次増長し」ていった感があるのは否めないにしても、それは彼の思慮分別のなさと意志の弱さからくるものであって、あながち家庭での両親の訓育のせいばかりとはいえないであろう。このような不良性をもった与兵衛がお吉を殺し身の破滅に至るのも、元をただせばみな「金」が原因となっているのである。これは従来の世話悲劇と同様であるが、

これまでならここで主人公の破局を決定的にする為の受難なり過失なり、あるいは敵役の暗躍なりがあったのであるが、『油地獄』にはそれがない。そういう外的な要因を設定する代りに主人公自身に悪役的な性格をもたせ、意志薄弱なただの男としての一面との間におこる矛盾、葛藤を悲劇の要素として構成しているのである。高野正巳氏の御説のように「敵役は主人公の中に潜む魔性の人格化せられたものであって、彼こそ主人公の罪過を一身に引き受けて観客の悪罵を浴びるもの」だという見方をすれば、これまでの作品ではこのような魔性はすべて主人公に対立する敵役という存在の中に存するものとされてきたのであるが、この曲に至って、それは主人公一人の内面における善悪の葛藤といったものに転移されたのである。与兵衛の破局は、このような彼自身の分裂した性格から起こるのである。ここにこの曲の近代性があるのだといえるであろう。

『女殺油地獄』には、近松のいわゆる世話悲劇の概念にはない広義の悲劇ともいべき近代的な悲劇性、すなわち人間の性格悲劇の要素が多分に含まれており、それに従来の境遇悲劇が絡まって一つの型を成しているのだといえよう。

二

『女殺油地獄』は恐ろしい作品である。これは近松のそれまでの世話浄瑠璃におけるいろいろな意味での類型を明らかにのみ出してゐる。そして、前述したように、その一部を除けば、時代をこの現代社会に置き換えても充分通用し得るものをもっている。設定しか

り、筋の運び、構成しかり、そして何よりもその主人公がまるで現代の非行青少年をみるようなのである。得手勝手で自己を中心にしてしかものごとを考えられない男、向う見ずで感情的で、「こはい目知らぬ無法者」かと思えば、いざという時には打つ手も全く思いつかないというような小心で臆病で依頼心のつよい男、これが主人公与兵衛のプロフィールである。

『女殺油地獄』が、近松晩年の傑作の一つとして、又、注目すべき作品として論ぜられてきた所以が、この主人公与兵衛の存在にあることは間違ひあるまい。それまでの近松の世話物の主人公達は、実説がどうであるにしろ、そのほとんどが美化され、同情と共感の対象となる悲劇の人物とされてきた。

しかし、この曲における主人公河内屋与兵衛は、この近松における主人公としての要素を持たない悪玉であり、むしろ脇役的要素をすら持っているのである。しかも与兵衛は、悪玉とはいっても『曾根崎心中』の九平次や『今宮の心中』の由兵衛などとは違って、どこかもう一つぬけたところのある、何か憎めない一面をもつ小悪党にすぎない。井上豊氏がいわれるように、与兵衛の不良性は家庭中心のものであって、お吉殺しをひき起こすまでは社会悪の性質は全く薄かったのである。現代社会にでもよくみられるようなグレかかった放蕩息子、よく似た例がそこらにころがっていそうなそんな人物、こういう与兵衛像の造型には、それまでの類型性を脱した近松の近代的センスがうかがえる。が同時に、それ故にこの曲は当時の浄瑠璃劇の型からはみ出してしまったともいえるのである。娯楽を

求めてやってくる一般大衆にとって、主人公が最後まで同情すべきところのない悪玉で、しかもとどのつまり処刑されるというのでは全く好みに合わなかったのであろう。横山正博士の御指摘のように、与兵衛の超近世的性格が近世の町人の理解し得る範圍を越えてしまい、その結果がこの曲の不評としてあらわれたのであろう。

さて、ここでは『女殺油地獄』に描かれている与兵衛の性格を、その行動を通して順に見ていきながら、近松の形づくった与兵衛像をうきばりにしてみたいと思う。

まず与兵衛の性格形成に重要な要素となるのは生活環境である。前述したように父の徳兵衛は手代あがりで、先代が亡くなって後その女房の入り婿となった人で、与兵衛兄弟には継父にあたる。実父に死に別れた時、与兵衛は四歳であったが、継父はそれまで「ぼん様」と呼び「徳兵衛」と呼び捨てにされていた間柄であったことを思うと、与兵衛が放埒を重ねても親らしい強意見や叱責もできない。それに対し、母のお沢は、後夫徳兵衛への義理立てから、与兵衛に厳しくする反面偏愛したりもする。このような家庭状況の中で、このような両親にはさまれて成長した与兵衛、彼の不良性を助長する要素はここにも設定されているといえるであらう。

上巻において登場する与兵衛は、単純で小心で軽薄で、空威張だけのチンピラの風情である。遊女の小菊が自分の誘いを袖にしたことに腹を立てて仲間を語らって喧嘩を吹かけても、小菊が彼の自尊心をくすぐるような甘い言葉をちよっとささやくと、もうすぐそれによって今までの怒りもどこへやら、「色こそ見えね河与が悦

喜、エ忝い」と手放しで嬉しがってしまったような単純な男、それが、武士に誤って粗相をしかけてしまい、斬られる破目に陥いると、もうすっかり取り乱してしまつて、前後の判断もつかないような小心な男、しかし何となく憎めなくて苦笑をさそうような男、それが上巻に描かれた与兵衛の姿である。

中の巻にはこれに狡さが加わり、すでに小悪化化した与兵衛の姿が描かれている。すでにばれていても知らず、平然と口から放題の嘘をつく与兵衛、自分の悪巧みがあらわれると、恩ある継父や病みかけた妹や実の母にまで平気で暴力をふるう与兵衛、彼の論理ではすべての義理の關係が自分に向つての一方通行ということになるのである。自分は借りた金も返さず、嘘もついたままの不義理を重ねているのに、金の無心が成功しないとなると、実直な兄を指して「義理も法も知らぬやつ」とののしり、又二十年近く育ててくれた継父に対しても恩返しをするどころか金が引き出せないと知るや、「道しらずめ」とののしり、「うつぶけに踏みのめらし、肩ばね脊ばねうん／＼と踏みつくる」といった態度をとる。病気の妹に対しても、「死霊のついた顔してこのよに／＼言うてくれ。それからはあきなひも精出し、親達へ孝行つくし逆らふまい」と「誓文だて」しておきながらその約束を自分が破ったことは棚に上げて相手だけを「いきめらうめ」と口汚くののしったり踏んだり蹴ったりするといった具合である。そして、そのような悪党ぶりにも似合わず、彼は母に「町中よせて」といわれるともうぎよつとして力がぬけるのである。

こうして両親から勘当された与兵衛が、下の巻の最初で豊島屋の門前に立った時、「一しやうさゝぬ脇差もこよひこじりのつまりの分別」とあるように、すでに彼の胸には一つの企てが成されていたのである。もくろみがはずれた場合には奪い取つても金を手に入れたいという気持が彼の意識下にあったことは、この描写からもよくわかるであらう。この次にたまたま口入綿屋に会い、脅迫まがいの借金 の催促を受けたことが、与兵衛をして強盗さらに殺人まで犯させる原因となつたとする説が多く見られる。なるほどこの借金が与兵衛を絶体絶命に追いこむ一つの要因となっていることは否めないであらう。しかし、たとえここで催促を受けなくても、口入綿屋の「貴様は留守でも判は親仁の判」という言葉からもわかるように、与兵衛はこの節季を「越すに越されぬ」のは自分自身よくわかつているはずである。この場合の謀判の罪は、彼がこれまで父母や兄から偽つて金を捲き上げてきたことなどは少しわけが違ふのである。私は、ここで正面きつて訴えるなどとおどかさねなくても小心な与兵衛の性格からみて、すでに切羽詰つた気持になつていたと解したい。この窮地に陥つても与兵衛はまだ「拔差しならぬこの二百匁、ある所にはあらうがな世界は広し二百匁などは、誰ぞ落しさうなものぢや」などと頼らないことをいつている男である。このように、何か事にあたってはいつの場合でも消極的受身的であつた与兵衛が、その動機や内容はともかくとして、はじめて事態を積極的に打開すべく決意するのである。次の徳兵衛夫婦の愁嘆場を陰で聞いていた与兵衛の心の動きを指して、栗山理一氏は「勘当した母親の

心情はもとより、義理の間柄にある継父の、与兵衛に対する苦衷と愛情は、これまでただ反抗し軽蔑してきた継父に対する考え方を一変させるほどに哀切なものであつたはず」だといつておられるが、これは果してどうであらうか。ひろん、栗山氏のいわれるように「長たしい親達の愁嘆聞いて、涙をこぼしました」とか「ハテ与兵衛も男、二人の親の詞が心根にしみこんでかなしいもの」などとお吉に語る与兵衛の言葉も、あながち嘘ばかりとは言いきれないであらう。しかし、与兵衛が豊島屋の中に入る時、「父母の帰るを見て心一ツに打ちうなづき、脇差抜いてふところに」忍ばせるところや、お吉が両親の心づくしの金を彼の前に出した時、「これが親達の合力か」などという与兵衛の言葉をきくと、中の巻にあらわれた与兵衛の性格と照し合わせて、やはりこれも与兵衛の得意の口から出まかせの要素がつよいのではないかと思われるのである。栗山氏はこれを、「悔恨は強奪という悪行への決意を消し去るものとしてではなく、親へ難儀をかけたくないという気持の方に擬つて、かえつて悪行の決意を固めさせる結果となつてゐる」とされているが、私にはどうしてもそのようにとは思えないのである。それは、次に与兵衛がお吉に切々と自分の窮状を訴える際の描写に、「お吉様、どうぞ貸して下さいと言ふ目の色も誠らしく」という表現からもわかるであらう。「夫の留守に一銭でも貸すことはいかな／＼」と断り、夫に疑われるからというお吉に、「不義になつて貸して下さい」という与兵衛の態度も、依頼心のつよい彼の性格のあらわれとみれば肯けなないこともない。それに、今「涙をこぼしました」とか

「心根にしみこんだ」とか言っておいてその同じ口の下からすぐ金を貸せというのではお吉でなくても「ならぬ」というところなのがあるが、与兵衛からすれば、このことには何の矛盾も感じられないのである。ここに、自己中心的で冷静にまわりを見まわすことを知らぬ与兵衛の性格上の大きな欠陥があるのである。さらに、お吉殺しの場で、「そんなら声立てまい。今死んでは年はいかぬ三人の子が流浪する」と助けを求めるお吉に対し、「おれもおれをかはいがる親仁がいたい。かね払うて男立てねばならぬ。あきらめて死んで下され」と答える与兵衛の言葉にも「男立てねば」という与兵衛の体裁を先に考える性格がよくあらわれている。「親仁がいたい」などというのはお吉の言葉に対応する為の理由づけにすぎない。これは栗山氏のいわれるように、まさに「自分を救うという立場の偽態」であり、「虚栄の心理」である。

犯行後の「ぞつとわれから心もおくれ、膝ぶしがた／＼がたつく胸を押しさげ／＼」や「寝たる子どもの顔つきさへわれをにらむ」などという描写も本来小心な与兵衛の性格やその時の心理状態をよくあらわしている。一方、金を奪ってから凶器の脇差はさつと川に捨て、「沈む来世は見えぬ沙汰、この世の果報のつき時」と逃げさるる与兵衛の姿も又、与兵衛の性格の一面なのである。その後、つかまるまでの与兵衛の行動は順を追って叙述されてはいないが、反省して行ないを改めるのではなく、奪った金で方々の支払いを済ませた後、相も変わらず遊びまわっていることが、次の新町や新地の廓の場でわかる。それに、自分を伯父が捜しまわっているの

を知った時も、「早うはづして逢ひともないと思へど急にも立たねば、何がなしほにと」とあたりから不審に思われない工夫まで考えが及ぶほどである。これなど狡智にたけた与兵衛の本来の性格の一面がよく出ている。そして、罪が発覚した時も動かぬ証拠をつきつけられてはじめて覚悟するのである。そこで彼は「大音あげ」で次のように白状するのである。

一生不考放埒のわれなれども、一紙半銭盗みといふ事つひにせず。茶屋傾城屋の払ひは一年半おそなはるも苦にならず。新銀一貫匁の手形借り、一夜過ぐれば親の難儀、不孝のとが勿体なしと思ふばかりにまなこつき、人を殺せば人の歎き、人の難儀といふことにふつつと眼つかざりし。思へば廿年来の不孝無法の悪業が、魔王となって与兵衛が一心の眼をくらまし、お吉殿殺し金を取りしは河内屋与兵衛、仇も敵も一ツ悲願なむ阿弥陀仏

樋口慶千代氏は『近松考』の中で「家庭教育の欠陥」と題して、これを指して与兵衛は罪障懺悔したと論じておられるが、私はこれは懺悔というよりは万策つくてもなお責任を軽くしようとする与兵衛の自己への虚栄の念ではないかと思う。懺悔ならば「大音上げ」とはならないのではないだろうか。

こうして見てきた場合、私も与兵衛がいわゆる性格破産型の青年であることを否定するわけではないが、井上豊氏のように、与兵衛に良心の目覚めの可能性までを見る考え方にはもうひとつ賛成できない。だからこそ近松も最後に「世のかゞみ伝へて君が長き世に清

からぬ、名や残すらん」として締め括っているのである。近松も与兵衛の罪を許してはいない。このように与兵衛が改心したかのように見せかけているのは、ひとえに「人の心の慰みとなる」ことを重んじる近松の精神の故であろう。

このように、「実と虚との皮膜の間」をよしとする近松の作品の中でもこの曲は写実性具体性に富み、現実味を帯びている点では群をぬいた作品であり、その点で又一面現代性に通じるのである。いづれにしても、今から二百五十年余りも昔に、このような近代性あふれた作品がつくられたことは驚異に価することであろう。

本稿は昭和四十四年度卒業論文の要旨をもとにして新たに書きおろしたものである。

執筆者紹介

原 田 芳 起 本学教授

久 保 重 本学教授

西 畑 実 本学助教授

嘉 部 嘉 隆 本学助教授

馬 淵 康 子 本学図書館司書補

(本学国文科
昭和四十五年三月卒業)

中 塚 裕 子 本学国文科学生